

## 韓国の児童向偉人伝叢書にあらわれる人々

井上雅夫\*

(1995年1月13日受理)

### まえがき

児童書や教科書で児童は、いろいろな人物についての伝記を読む。伝記を読む目的はなんだろうか。おそらく、児童が読む伝記に取り上げられる人物の大多数は、児童にとって好ましい影響を及ぼす人物である。好ましい影響を及ぼすかどうかの判断はだれが下すのか。児童が所属している社会である。社会の規模や性質はさまざまな場合が考えられる。家庭を考えてもいいし、学校を考えてもいいが、社会として国を考えてみよう。日本人が自らの子弟に読ませたい伝記と、中国人や韓国・朝鮮人がその子弟に読ませたい伝記とは同じであろうか。

筆者は、中国で多数刊行されている児童向科学者の伝記では中国人科学者が圧倒的に多く取り上げられていることを報告したことがある。<sup>1)2)</sup>それらの人物の時代は周代までさかのぼるし、なによりも「自国が誇る人物である」という姿勢が伝わってくるものであった。

今回は、韓国の児童がどのような人物の伝記を読むか、なぜ読むのか、をみてみたい。

韓国の国語教科書(小・中・高)に載っている伝記に関しては、『韓国の教科書の中の日本と日本人』<sup>3)</sup>という書物が刊行されており、10名ほどの方の伝記が載っている。しかし編訳者の筒井真樹子が巻頭で述べている(後述)ごとく、「日本に関わりのある人たち」という限定がついている。筆者にとってそれは不満であった。そのような限定をつけずに韓国の教科書や書籍にあらわれるままの人選で伝記を読むことこそが、韓国理解につながると考えたからである。今回、キョングジ社刊の『偉人伝叢書』23冊と国民学校のさまざまな教科の教科書を手に入れたことにより、あるがままの人選での伝記を読みたいという願いをかなえることができた。

### 隣国理解の一助に

柳寛順、崔茂宣、尹奉吉、安重根、李舜臣、権慄、周時経、李商在、郭樂園、金マリア……この10人のうち何人を知っているか、と尋ねられたら、あなたはなんと答えるだろうか? おそらく、特に韓国に関心のない日本人なら、自信を持ってひとりを答えることもむずかしいのではないだろうか。というのも、日本の歴史教科書では、これらの人々に全くといっていいほどふれていないからである。私がたまたま目にした教科書(山川出版社刊「新詳説日本史」)は、その内容が豊富なことで定評があるらしいが、それでもわずかにひとり、李舜臣の名が見られるだけである。伊藤博文をハルビン駅頭で射殺した安重根の名前すらもあきらかにすることができず、なぜか「韓国青年」とのみ記されている。このように日本と深い関わりがある人の名前までもあえて伏せる理由が、私にはどうしてもわからない。

\* 岩手大学教育学部

確かに、この10人は皇帝でもなければ政治家でもないのに、歴史の教科書に登場させるには難があるかもしれない。そして、これらの人々を知らなくても、朝鮮・韓国を知る上ではなんら支障はないとも言えるだろう。だが問題は、これらの人々は、韓国人なら子供でも知っている人たちであり、国民学校（小学校）や中学校の教科書にも載るほど人々に敬愛されている人たちだということ、そして、いずれも日本に関わりのある人たちだという事実である。（後略）<sup>3)</sup>

## 1 伝記で取り上げられた人々

### 1 『偉人伝叢書』（キョンジ社刊）で取り上げられた人々

筆者の手許には、キョンジ社刊『偉人伝叢書』のうち23冊があるが、そこで取り上げられている人物25名を時代順に並べてみると、つぎようになる。

- 6世紀 高句麗時代 オンダル（温達）とピョンガンゴンス（平岡公主）<sup>4)</sup>
- 9世紀 新羅時代 チャンボゴ（張保臯）<sup>5)</sup>
- 10-11世紀 高麗時代 カングムチャン（姜邯贊）<sup>6)</sup>、チェムソン（崔茂宣）<sup>7)</sup>
- 15世紀 李朝時代 ファンヒ（黄喜）<sup>8)</sup>、セジョンデワン（世宗大王）<sup>9)</sup>、チャンヨンシル（蔣英実）<sup>10)</sup>
- 16世紀 李朝時代 イファン（李滉）<sup>11)</sup>、シンサイムダン（申師任堂）<sup>12)</sup>、イユルゴク（李栗谷）<sup>13)</sup>、ハンソクボン（韓石峰）<sup>14)</sup>、イスンシン（李舜臣）<sup>15)</sup>
- 17-18世紀 李朝時代 オソンとハヌム<sup>16)</sup>、パクムンス（朴文秀）<sup>17)</sup>、イスンフン（李承薫）<sup>18)</sup>
- 19世紀 李朝時代 キムジョンホ（金正浩）<sup>19)</sup>
- 20世紀 アンジュングン（安重根）<sup>20)</sup>、ユグァンスン（柳寛順）<sup>21)</sup>、ユンボンギル（尹奉吉）<sup>22)</sup>、アンイクテ（安益泰）<sup>23)</sup>、アンチャンホ（安昌浩）<sup>24)</sup>、パンジョンファン（方定煥）<sup>25)</sup>、キムグ（金九）<sup>26)</sup>

時代の範囲も広いが、政治家、民族運動家、軍人、学者、発明家、思想家、芸術家（美術・書道・音楽・文学）等分野も広範である。これらの人々についてわれわれ日本人はどのくらい知っているだろうか。オンダルとピョンガンゴンスのように民間の伝承で語られる人物は馴染みがなくても当然かもしれないが、正史に現れる残りの人物さえ、専門家を除けば、はじめて聞くという日本人は多いと思う。そこで、これらの人物がなぜ偉人とされるのかの議論をする前に、どのような人々であるかを簡単に述べておこう。

#### (1) オンダル（温達）とピョンガンゴンス（平岡公主）

二人にまつわる話はつぎのようなものである。

高句麗の第25代ピョンウォン（平原）王（在位559-590）は別名、ピョンガン（平岡）王とも呼ばれました。このピョンガン王の時代に、オンダルという少年がいました。オンダルは顔があまりにも醜かったので、見る者はだれも笑いをこらえることができないほどでした。しかし心はとてもやさしい少年でした。貧しいオンダルは村を巡りながらご飯を貰い、年老いた母によく尽くしました。この頃ピョンガン王には幼い姫がいました。ところが姫は夜も昼もややもすれば泣くのが仕事のようなのでした。ピョンガン王の姫は泣き声のたえることがなく、よくかんの虫を起こし、ぐずりました。

「えい、何て子だ。あんなに泣いてばかりいるなんて。泣くのをやめないと馬鹿のオンダルのとこ

ろに嫁にやるぞ!」

姫は言葉を何とか聞き取れるような歳になってからもよく泣きました。ピョンガン王は姫が泣くときも口癖のように言いました。

「仕方がないから、馬鹿のオンダルにでも嫁にやろう。他の者ならお前のような泣き虫を連れていくまいが、馬鹿なオンダルなら連れていこう」

そんな姫は歳が16歳になると幼い時とは違って、慎ましやかな娘に成長しました。

そこでピョンガン王は考えを変え、姫を貴族の青年に嫁にやろうとしました。すると姫は、意外なことを言い出しました。

「お父様、私は馬鹿のオンダルの家に嫁ぎたく思います」

「何だと？ それは予がお前が幼い時、あまりよく泣くので泣きやませようとして言ったことだ」

「お父様。ですが、私はその時の言葉に従います」

「おお、子が親の気持ちに逆らうというのだな。あくまでそうするなら、お前は私の娘ではない。今すぐに出て行け！」

父の王の前から退いた姫は、自分が持っていた金のかんざしと金の腕輪などの装身具を包んで、王宮を出ました。ピョンガン姫はすでに訪ねていくところを心の中で決めていました。馬鹿のオンダルを訪ねようとしていました。山を越え、川を渡り、姫はやっと家を探ることができました。オンダルのお母さんに会ったピョンガン王の娘は、オンダルの妻となって一緒に住みたいとねんごろに願い出しました。

「私の息子は世の中の人々が皆知っているように、卑しい人間です。どうして貴い身のあなた様が、そんな息子の妻となろうというのですか。その上、こんなに貧しいところで何をして食べて暮らすというのですか」

オンダルの母が遠慮がちに断ると、姫は哀願するように言いました。

「お母様、一緒に住めるようお許しください。食べて暮らすのは私が何とかしますので」

姫は根気よくオンダルの母を説得し、その日からオンダルの家の家族となりました。ある日、姫はオンダルに金のかんざしを差し出して言いました。

「今日、市に行って馬を1頭買ってきてください。見栄えは悪くても、必ず王宮の血筋を引くのを選んで買いなさい」

オンダルは姫が言った通りの馬を1頭買ってきました。

姫は馬を愛情込めて育てました。そうしてオンダルに、いつもその馬に乗って狩りをさせました。オンダルはいつの間にか、馬に乗って狩りをする技がとて上達しました。その上、武術も身につけたオンダルは今や、いかなる將軍にも劣らず勇ましくなりました。

その頃、高句麗の風習は、毎年3月4日になれば狩りをよくする人を集め、狩りの大会を開いていました。

そして、狩りで獲った獣で天と山河に祭をあげました。狩りの大会には、国王が大臣と軍隊を率いて参加しました。オンダルは狩りの大会で並外れた手並みを見せました。狩りの大会が終わって、獲物を一番多く捕らえたオンダルは、褒美をもらうためにピョンガン王の前に出ていきました。ピョンガン王は自分の目を疑うようにオンダルの顔を穴が開くほど見つめ、尋ねました。

「お前が馬鹿のオンダルと呼ばれた、まさしくあのオンダルなのか」

「はい、そうであります」

オンダルはこの日の栄光を妻のピョンガン王の姫に譲りたくて、これまでの話を国王に聞かせまし

た。すると、ピョンガン王はオンダルが娘の夫となっている事実さらに驚きました。

その後、オンダルは周の武帝が軍隊を率いて高句麗の遼東の地（現在の遼陽）に入ってきた時出征し、大きな功をたてました。高句麗に勝利をもたらしたオンダルはピョンガン王にまた呼ばれました。

「オンダルは、はたして予の素晴らしい婿だ」

ピョンガン王はオンダルを称え、大兄という高い位を与えました。<sup>27)</sup>

(2) チャンボゴ（張保臯 ?-846)

新羅時代の商人。海賊を掃討して黄海の海上権を確保し、唐および日本との貿易を独占した。中央貴族の王位争奪戦に加わり、神武王を即位させる力となったが、暗殺された。

(3) カンガムチャン（姜邯贊 948-1031)

高麗時代の将軍。契丹軍 10 万を大川の戦いと「亀州大捷」で 2 千余名になるまで打ち破った。この大勝により、30 年以上高麗を悩ませてきた契丹の侵略は終わりを告げる。

(4) チェムソン（崔茂宣 14 世紀後半)

高麗時代の人。倭寇に悩まされた高麗は新兵器開発に力を注いだ。チェムソンは火薬を研究し、中国人から火薬製造技術を盗もうとしたが、中国はその技術の外国漏洩を禁じていた。チェムソンは、毎日のように港へ足を運び、李元という中国人と知り合いになり、火薬製造法を教えてもらうことに成功した。1377 年に朝廷が設置した火薬兵器開発の役所でチェムソンは責任者となる。それから 6 年後、製作した火砲の威力を試す機会が訪れた。五百隻余の倭寇の軍船をすべて沈め、西海岸に出没していた艦隊に大打撃を与えた。

(5) ファンヒ（黄喜)

李朝第 3 代太宗のもとで吏曹判書を勤めていたが、世子の交代に反対したため流刑の身となる。しかし、第 4 代世宗のもとでは宰相を勤めた。清廉な政治家として模範的儒教政治を展開した。

(6) セジョンデワン（世宗大王 在位 1418-1450)

李朝第 4 代の王。福祉向上、納税制度・義倉・医療制度・刑罰制度の改善、奴婢の地位改善など内政に意を尽くした上、領土拡張にも力を傾けた。学者を優遇し、民族的自覚を促す精神文化や生活に役立つ技術開発も奨励した。また、「訓民正音」を制定し、朝鮮独自の文字（ハングル）を創った。

(7) チャンヨンシル（蔣英実 ?-1615)

下僕ではあったが、機械類の操作や製作にすぐれていることを部下から聞いた世宗大王に呼ばれ、天文観測器械の製作に当たった。正南仰釜日晷（日時計）、渾天儀（天球儀）、自撃漏（水時計）、日星仰釜日晷（昼夜兼用時計）、測雨器（雨量計）などをつくったが、測雨器は世界最初の雨量計でもあった。

(8) イファン（李滉 1501-1570)

号はテゲ（退溪）。イイ（李珥）と並び称される朝鮮性理学の双璧の一人。故郷のイエアン（礼安）に陶山書院を建て、数多くの書籍を著した。その著作は、のちに日本へ伝わって日本の儒学界に多大の影響を及ぼした。嶺南（小白山脈の南）学派に属する。

(9) シンサイムダン（申師任堂 1504-1551)

イユルゴク（李栗谷）の母。花、蝶、雁をよく描いた画家。朝鮮の母性の典型と見なされている。

(10) イユルゴク (李栗谷 1536-1584)

イイ (李珥) とも言う。ユルゴクは号。李朝中期の性理学者で、イファン (李滉) と並び称される。シンサイムダン (申師任堂) の息子。畿湖 (京畿道と湖西すなわち忠清道の地方) 学派に属する。

(11) ハンソクボン (韓石峰 16世紀後半)

韓濩とも呼ばれる。名筆で名高く、その「千字文」は現在も手本とされている。母の厳しい教育についていくつもの有名な逸話が残っている。

(12) イスンシン (李舜臣 1545-1598)

1592年にイムジン (壬辰) 倭乱 (わが国で言う文禄の役) が起きた。朝鮮陸軍はたちまち敗れ、都の漢城も陥落した。その時イスンシンは、コプクソン (亀甲船) を率いて日本水軍を大いにうち破った。やがて1597年にチョンユ (丁酉) 倭乱 (わが国で言う慶長の役) が起きるが、その時かれは謀反の疑いをかけられて牢につながれていた。今度は陸戦では朝鮮側が優勢であったが、海戦では劣勢であった。牢から解放されて再び水軍の指揮をとったイスンシンは日本水軍に大勝するが、敵の銃弾に当たって戦死した。

かれは、救国の英雄として、アサン (牙山) の顕忠祠にチュンム (忠武) 公としてまつられている。

(13) オソン (1556-1618) とハヌム (1561-1613)

オソン (イハンボク 李恒福) とハヌム (イトクヒョン 李德馨) は、東人と西人の党派抗争に明け暮れし壬辰倭乱にも苦しむ朝廷で、朝鮮第14代宣祖 (在位1567-1608) に仕えた名臣。二人は竹馬の友として生涯固い友情で結ばれていた。その厚い友情に関する逸話も多いが、少年時代の機知に富む逸話も多い。

(14) パクムンス (朴文秀 1691-1756)

かれがどのような人物であるかを示すつぎのような逸話がある。

英祖 (在位1724-1776) は、よい臣下を抜擢し、またかれらをとても大切にしました。英祖はとくに、パクムンスを信任しました。かれの言うことなら拒絶することがありませんでした。パクムンスが、暗行御使 (朝廷の隠密) で功績を上げ朝廷に帰ってきた時です。臣下たちがパクムンスに、国王の前で頭が高いと言って非難しました。

「そうではない。殿下に申し上げる時に、ただ頭を垂れるのは、へつらう奸臣のすることだ」

パクムンスが、非難する臣下たちにきっぱり言うと、英祖はこう言ってパクムンスを励ましました。

「王と臣下の間をあまりむずかしく考えるのはよくない」

「今後、予と話をする時は頭を上げるがよい」<sup>28)</sup>

(15) イスンフン (李承薫)

朝鮮で、初めて洗礼を受けたキリスト教徒。1783年に北京に行き、イエズス会宣教師からキリスト教の教理を深く学び、洗礼を受け、さらに、贈られた書物や十字架を朝鮮に持ち帰った。1785年の朝廷による大弾圧で、イスンフンを含む多数のキリスト教指導者たちが捕らえられたが、そのほとんどが名門出身の若い学者であったため教え諭されただけで釈放された。それにもかかわらずキリスト教勢力の拡大は続いた。それとともに逮捕・釈放も繰り返された。弾圧はしだいに厳しくなり、ついに、1800年の辛酉邪獄事件でイスンフンをはじめ300余名の信徒

が処刑されるに至った。

(16) キムジョンホ (金正浩 ?-1864)

著名な地理学者。1861年に作成した「大東輿地図」は、山脈、河川、道路、倉庫などをきわめて精密に表示している。このような地図が作成されるに至ったのには当時の朝鮮の置かれた状況を考えねばならない。

倭乱と胡乱(筆者注 清の侵入)の中で、サリム(士林)が高い文化的矜持と愛国心をもって抵抗したその気魄は大きなものであった。しかし、戦乱が終わった後にもあいかわらず性理学のみが最高の価値であると主張し、女真(清)と日本を蔑視する立場を守り、物質文化の落後性や社会的葛藤を是正、克服しようとする努力に不足するところがあったので、かれらの主張は国民的共感を受けることができなかった。

ここに、一部先覚的な儒学者たちは、性理学一辺倒の文化の持つ限界性を悟り、精神文化と物質文化の均衡ある発展をさせて富国強兵と民生安定を達成し、内には分裂した社会を再統合し、外には急変する国際情勢に対処する国家力量の強化をめざす文化運動を展開するに至った。

このような新しい文化運動は、学術や宗教、哲学、文学、芸術などすべての文化領域に発生したが、そのなかでの学術分野に現れた新しい学風をわれわれは実学と呼んでいる。(中略)

実学者たちの愛国的関心は国土に対する研究を促進させ、優秀な地理書と地図が製作された。地理書としては柳馨遠の『輿地誌』をはじめとして、李重煥の『択里志』、申景濬の『疆界考』、丁若鏞の『我邦疆域考』と『大東水経』、金正浩の『大東地誌』などが著述された。特に『択里志』は我が国の各地方の自然環境と人物、風俗、人心との特色などを興味深く叙述した人文地理誌である。

地図製作には英祖の代の鄭尚驥と哲宗の代の金正浩の業績が最もすぐれており、前者は『東国地図』を、後者は『青丘図』、『大東輿地図』などを製作した。<sup>29)</sup>

(17) アンジュンゲン (安重根)

韓国侵略の元凶として伊藤博文を、ハルビン駅で銃撃殺害した。

(18) ユグァンスン (柳寛順 1904-1920)

韓国の子どもにとって、もっともよく知られている歴史上の人物の一人。「朝鮮のジャンヌ＝ダルク」と呼ばれる。

ソウルで学ぶ女学生であったかの女は、1919年の三・一独立運動に積極的に参加し、傷ついて日本軍に捕らえられた。「日本人に私たちが裁く権利はない。罪人として裁かれねばならないのは日本人だ」と主張したが、激しい拷問の末、獄中で死亡した。

(19) ユンボンギル (尹奉吉 1908-1932)

1932年4月29日上海の虹口公園で開かれた天長節祝賀式典会場でかれが投じた爆弾は、白川義則大将を殺し、重光葵公使、野村吉三郎海軍大将など10余名の日本人高官に傷を負わせ、逮捕されて、大阪で処刑された。

(20) アンイクテ (安益泰 1905-1965)

チェロ奏者として出発したが、のちに欧米で指揮者として活躍した音楽家で、スペインで死去した。若い頃日本に留学、1960年に来日した。かれが1936年に作曲した、「東海の水と白頭山が乾いてすり減るまで」の文句ではじまる「愛国歌」は、国民の間で愛唱され、独立意識を高めるのに貢献し、1948年に正式に国歌として採択された。

## (21) アンチャンホ (安昌浩 1878-1938)

初め、独立協会運動に参加したが、1902年に渡米し共立協会を組織した。1907年に帰国してからは新民会の指導者として愛国啓蒙運動を展開した。朝鮮併合直前に国外に亡命し、米国や中国で活動を続けたが、1932年に逮捕され、朝鮮に送還、投獄された。1937年には修養同友会事件で再逮捕。やがて保釈されたが、獄中で得た病気がもとで死去した。

## (22) パンジョンファン (方定煥 1899-1931)

三・一運動後、朝鮮総督府が文化政策を敷くと、新聞や雑誌の刊行が活発になった。このような雑誌を通じて作家の作品も多く発表された。パンジョンファンはとくに児童のために働き、1920年に童話集『愛の贈り物』を発表、雑誌「オリニ(子ども)」を発刊した。またセットン会という集まりを組織し、童謡、童詩、童話を普及させた。「子どもの人格を尊重し、子どもを正しく育てることが、わが同胞が豊かに暮らして行ける道だ」というのがかれの主張であった。

## (23) キムグ (金九 1876-1949)

第2次大戦後の指導的政治家の一人。かれがいかに尊敬されているかをつぎの引用文でみてみよう。

国連朝鮮臨時委員団が入国し、北の入国拒否で、南だけの単独政府(単政)の樹立が決定されました。5000年もの間ともに暮らしてきた同胞の指導者キムグ先生はじっとしていることができませんでした。

「私は統一された国を建てるために38度線を枕に倒れることがあっても、一身の安逸のために単独政府を建てるのには協力はしない」

キムグ先生は一生を祖国の幸福のために身をささげてきた方です。キムグはそれほど民族の尊敬を受けました。そうしたキムグが単政樹立に反対して立ち上がると、キムギュシク(金奎植)ら他の指導者も彼に従いました。ただイスンマン(李承晩)と韓国民主党(韓民党)だけが、単政樹立に賛成しました。(中略)

(1948年)4月19日、北の提議により、ピョンヤンで第1回南北政党・社会団体連席会議が開かれました。南北の56の政党・社会団体が参加したこの会議に、南からは35の政党、社会団体が代表を送りました。キムグ、キムギュシクら民族の指導者もこの会議に参加しました。

この会議に参加した代表たちは民族の将来をめぐって話し合いました。その結果、単政を拒否し、外国軍隊を撤収した後、臨時政府を樹立することを決定しました。この臨時政府はただちに憲法をつくり、南北が一つとなった民主政府を形づくるとしました。この連席会議は、南で5・10選挙が行われた後、再び開かれました。ここでは5・10選挙を非難し、また第1回会議とは異なり、臨時政府ではなく中央政府を樹立してから、外国軍隊を撤収させると決議しました。

しかし、このような我が民族の単政反対や南北代表の連席会議も効果を取めることはできませんでした。巨大な米ソ両国が、朝鮮半島を分断し、一步も譲歩しなかったからです。(中略)

(1948年)南に大韓民国政府が樹立されると、北も朝鮮民主主義人民共和国という旗印を掲げました。北ではソ連が支援する共産主義者キムイルソン(金日成)が、民主主義者のチョマンシク(曹晩植)を抑えて政権を握ったのです。

これはただならぬことでした。同じ民族同士、それもずうっとこれまで同じ領域で肩を寄せあいながら暮らしてきたのに、一方は自由民主主義、もう一方は共産主義となって分かれたので、大変だと言わざるを得ませんでした。もちろんこれは我が民族の意思とは関係なくなされた、冷戦の犠牲でし

た。(中略)

1949年6月、民族の巨星が墜ちました。民族の指導者、キムグ先生がアンドウヒ(安斗熙)の撃った銃弾に倒れたのです。米軍政期にもソンジヌ(宋鎮禹)、ヨウニョン(呂運亨)らが暗殺されたが、実に残念なことでした。<sup>30)</sup>

## 2 国民学校教科書にあらわれる人々

韓国の国民学校国語「読方」教科書(筆者注 国語教科書には「書き方」「話し方・聞き方」もある)には、小伝的教材がかなり多く載っている。下記に示すように、朝鮮人以外の人物も取り上げられているが、多くは朝鮮人である。

「読方」教科書は、第1学年用から第6学年用までであり、各学年とも1と2の2巻からなるが、第1学年教科書と第2学年教科書には人物伝は載っていない。

第3学年 「ファンヒ(黄喜)宰相」<sup>31)</sup>、「オングル(温達)とピョンガンゴンス(平岡公主)」<sup>32)</sup>

第4学年 「ユグァンスン(柳寛順)」<sup>33)</sup>、「ユンボンギル(尹奉吉)」<sup>34)</sup>、「オソンとハヌム」<sup>35)</sup>、「ハンソクボン(韓石峰)と母」<sup>36)</sup>、「トマス・エジソン」<sup>37)</sup>

第5学年 「チュシギョン(周時経)」<sup>38)</sup>、「シンサイムダン(申師任堂)」<sup>39)</sup>、「アンジュン(安重根)」<sup>40)</sup>、「キムジョンホ(金正浩)」<sup>41)</sup>、「月光の曲(ベートーベン)」<sup>42)</sup>

第6学年 「チョシク(曹植)」<sup>43)</sup>、「シュバイツァー」<sup>44)</sup>、「キムシスプ(金時習)」<sup>45)</sup>、「タゴール」<sup>46)</sup>

上に記した人々のほとんどが第1節で述べた『偉人伝叢書』に含まれているが、本節で初出の3人についてのみ、どのような人物であるかを簡単に紹介しておく。

チュシギョン(周時経 1876-1914)は、愛国啓蒙思想家として知られる。国語研究に力を注ぎ、『国語文法』を著した。弟子たちがつくった朝鮮語学会(1912年)は、ハングルの研究、国語の普及、ハングル辞典の編纂、綴字法の制定、標準語の査定などに大きな業績を残した。

チョシク(曹植 1501-?)は、16世紀にサリム(士林)派によって推進された儒教的政治に対抗するクァンヘグン(光海君 在位1608-1623)の革新政治の思想的バックボーンの一人で、儒学者。

キムシスプ(金時習 1435-1493)は、哲学者でもあったが、民間説話をもとに書いた伝奇小説集『金鰲新話』の作者として知られる。

伝記という範疇にとらわれず、特定の人物に関する逸話や歌を題材にした教材を求めれば、他教科の教科書にも教材を見出すことができる。たとえば国民学校道徳教科書では、つぎのような表題のもとに人物が扱われている

第4学年 「ヘーグに消えた巨星」<sup>47)</sup>、「国を守ろうと努めた人たち」<sup>48)</sup>、「筆の柄に入れて来た祖国愛」<sup>49)</sup>

第5学年 「児童のための一生」<sup>50)</sup>、「コロンブスの卵」<sup>51)</sup>、「天文研究とホンデヨン(洪大容)」<sup>52)</sup>、「愛の砂糖」<sup>53)</sup>

第6学年 「チュシギョン(周時経)先生」<sup>54)</sup>、「偉大な人たちの考え」<sup>55)</sup>、「音楽に捧げた一生」<sup>56)</sup>、「真の隣人」<sup>57)</sup>、「世界を一つに」<sup>58)</sup>

上記の教材の表題には、人名が入っておらず、そのままでは教材の内容がわからないものがある。それぞれについて簡単に説明をしておく。



「ヘーグに消えた巨星」は、官吏であったイジュン（李儁）を指す。1907年オランダの首都ヘーグで開かれた万国平和会議に、国王の高宗は、イジュンとイサンシル（李相高）の二人を密使として送り日本が侵略をしている実状を訴えようとした。しかしそのことを知った日本政府の妨害もあって、結局朝鮮代表の会議参加は認められなかった。そしてイジュンはヘーグで自殺したのである。

「筆の柄に入れて来た祖国愛」は、綿の種子を筆の柄にこっそりしのばせて元から持ち帰ったムンイクチョム（文益漸）の話である。罪人として雲南の地に流されていたかれは、1363年解放されて高麗に戻ることになった。その時10粒の種子を隠してきたという。その一粒が発芽に成功し朝鮮全土に綿花栽培が広まった。

「児童のための一生」は、パンジョンファン（方定煥）の話である。

「天文研究とホンデヨン」のホンデヨンは、朝鮮後期（18世紀）の学者である。当時ようやく西洋の学問（西学）の研究が盛んになった。ホンデヨンらは西洋の天文知識を受け入れて地球球形説や地動説も論じた。

「愛の砂糖」は、インドにおけるマザーテレサの話である。

「音楽に捧げた一生」は、歌曲「鳳仙花」などの作曲で知られる音楽家ホンナンパ（洪蘭坡）の話である。

「真の隣人」はイエス・キリストにまつわる逸話である。

「世界を一つに」は、エスペラント語の父ザメンホフの話である。

国民学校の教科書では、その他、第3学年の音楽教科書に「ユグアンソン（柳寛順）」の歌<sup>59)</sup>が載っている。

## 2 伝記から児童はなにを学ぶのか

伝記から児童はなにを学ぶのかという問題は、児童になにを学んでもらいたいのかの問題と表裏一体である。

第1章第2節で述べた教科書については、教師用指導書が手許にないため明確な答が出せないが、第1節で述べた『偉人伝叢書』についてはその問題に答えるかっこうの素材がある。すなわち、いずれの巻においても巻末に、作者が、父母や教師に対する読書の手引きを書いているのである。ここでは、その手引きを参照して、問題に答えてみたい。

『偉人伝叢書』からは、別の興味深い点をもとめることができる。どのような観点で人物を取り上げているかという点である。『偉人伝叢書』の作者たちが巻末の読書の手引きにつけたタイトルを見よう。そこには、一言で表現された人物評があると言ってもよい。

オングルとピョンガンゴンス 「馬鹿を将軍にした勇氣と知恵」<sup>4)</sup>

チャンボゴ 「新羅が生んだ海上貿易王」<sup>5)</sup>

カンガムチャン 「カンガムチャンの痛快な勝利・亀州大捷」<sup>6)</sup>

チェムソン 「火薬を作って倭寇を撃退した発明家」<sup>7)</sup>

ファンヒ 「清廉潔白な官吏の鑑」<sup>8)</sup>

セジョンデワン 「われわれに文字をくれた聖君」<sup>9)</sup>

チャンヨンシル 「日時計と水時計を作った科学者」<sup>10)</sup>

イファン 「深い学問、高い徳望の持主」<sup>11)</sup>

- シンサイムダン 「鑑賞と読書の指導」とあるのみで表題なし<sup>12)</sup>  
 イユルゴク 「無欲の生涯を送った大学者」<sup>13)</sup>  
 ハンソクボン 「民族魂を唱えて起つ大名筆家」<sup>14)</sup>  
 イスンシン 「倭賊を撃退し民族と国を守った名將」<sup>15)</sup>  
 オソンとハヌム 「聡明な無二の親友」<sup>16)</sup>  
 パクムンス 「解説」とあるのみで表題なし<sup>17)</sup>  
 イスンファン 「教育と実業、愛国に身を捧げた生涯」<sup>18)</sup>  
 キムジョンホ 「わが国の地図を描いた先覚者」<sup>19)</sup>  
 アンジュンゲン 「民族の仇を倒した義士」<sup>20)</sup>  
 ユグァンスン 「永遠の殉国の乙女」<sup>21)</sup>  
 ユンボンギル 「大韓独立のつぼみ」<sup>22)</sup>  
 アンイクテ 「愛国精神を音楽芸術に昇華」<sup>23)</sup>  
 アンチャンホ 「救国運動にささげた一生」<sup>24)</sup>  
 パンジョンファン 「子どもの永遠の友人」<sup>25)</sup>  
 キムグ 「わが願いは国の完全独立」<sup>26)</sup>

タイトルを一読しただけで、国家や民族のために働いた人物が多いことに気づく。また、友情や徳望が高く評価されていることにも気づく。『叢書』の人選はだれが行ったかは不明であるが、韓国人にとって突拍子もない人選ではないらしいことは、教科書で取り上げられる伝記の人物とあまり変わらないことから推測される。韓国人は民族を重視し、韓国には儒教精神が息づいている、とはよく言われるが、『偉人伝叢書』の個々の巻の「読書の手引き」の内容で、その点を確認してみたい。

イヒョソンが、著作『イスンシン』で、「偉人伝を読む目的」について述べている。

概して、「偉人伝」を読む目的は、第一に偉人の一生、第二に功績、第三に歴史的背景等を学ぶことです。

したがって、『イスンシン』を読む時、将軍として倭賊を撃退したという事実にもみ偏ることがあってはなりません。もちろんイスンシンと言えば、壬辰倭乱の時亀甲船を発明し倭賊を撃退したことを考えればこの点をもっとも重要なことは確かです。

しかし、一人の人間としての一生を知ること、これに劣らず重要なことを強調したいのです。

それは、イスンシンの生涯を少年時代・青年時代・壮年時代・晩年に分けて、「どのように生きたか」に注目することで、より明らかになります。

当時の時代背景を知ることも大切です。

イスンシンが生きた時代は、朝廷が大いに乱れていました。その上、他人を陥れる連中も多かったのです。だから、イスンシンは大功を立てたにもかかわらず2度も無位の一兵卒として前線で戦う嘆きを味わうことになります。その時代を知ることによってわれわれは、歴史知識も得ることになります。

本を読み終えたらなにか得るものがなければなりません。『イスンシン』を読み終えたら、少なくとも「日本軍を撃退した立派な将軍だ」と感じることでしょう。(後略)

(アンダーラインを施したのは筆者)<sup>15)</sup>

アンダーラインを施した箇所述べているのは、どの偉人伝にも通用する一般的な読み方である。しかし、そのような読み方をしながら得て欲しい教訓を、イヒョソンは続けて述べている。このように、教師や父母向けの「読書の手引き」には、作者が児童に伝えたい教訓がなんであるかが述べられている。いくつかの例を以下に示す。

発明家のように、本来、個人のしごとや業績に比重が大きく置かれる場合の例をまず見よう。

チェムソンの伝記は、化学的発明それ自体を理解し、当時の科学技術に対する社会や国の見方を推察するのに助けとなるが、かれの強固な意志の勝利を見る点にさらに大きな意義があります。<sup>7)</sup>

今日われわれがチャンヨンシルの話をする時まず考えねばならないのは、かれが生きた時代です。科学や技術を卑しいものと考えた時代に、かれがこのようにすばらしい発明を重ねられたことは、ひとえにセジョンデワンのすぐれた指導力のおかげであることを忘れてはなりません。

チャンヨンシル伝を通して、伸びゆく子どもに科学する精神を植え付ける契機になればと思います。<sup>10)</sup>

わが国には、学者、芸術家、將軍や王として歴史に名を残す人は数え切れぬほど多いが、チャンボゴくらい大きな抱負を抱いて早くから交易に目を向けた偉人はいない。

ほとんどの偉人たちは、狭い半島の範囲内で息苦しい息をしながら功績を残したが、チャンボゴだけはアジアの広い海を相手として貿易権を掌握しめざましい活躍をしました。(中略)

交易に国境はないという現実を考えた時、歴史上初めてアジアの交易圏をめぐったチャンボゴの雄大な抱負が子どもたちの心に永遠にとどまるように指導しなければなりません。<sup>5)</sup>

このように、業績が大きな比重を持つ人物に関しても、業績だけでなく、人柄や背景にも目を向けようとする姿勢をうかがいとれる。そして、つぎの例のように、業績よりも人格の方に評価の力点を置くものもある。

書と絵画にすぐれたシンサイムダンは、親孝行で、良き母で、賢明な妻であり、まさに真善美を兼ね備えたたぐいまれな女性とされているが、かの女の伝記の著作者はつぎのように述べる。

わが国の女性の鑑と言えるサイムダンは、わが国の歴史上に輝ける偉大な足跡を残しているのです。

われわれは、サイムダンのどのような点が立派で、手本となる点は何であるかを、本書を通して知らされるでしょう。<sup>12)</sup>

既述の引用文でも出てきているが、われわれが道徳の範疇で語る内容が、この『偉人伝叢書』には多く扱われている。その例をいくつか見てゆく。

良妻賢母とか孝行は、現在のわれわれ日本人には縁遠くなりつつあることかもしれないが、母の偉大さに関する話はハンソクボンの伝記でも述べられる。

ソクボンの母は餅を商いながらわが子を立派に育てることに一生をささげました。

母恋しさの余り寺での勉強を中断して家に戻ったソクボンに、母はどうしたでしょうか。灯火を消して餅切りと習字をしたという教えはあまりにも有名で、涙ぐましい努力に胸がつまります。

これは、孟子の母が孟子を立派に育てるために三度も引っ越した「孟母三遷の教え」に匹敵するほどの意志の強さなのです。(中略)

この世で偉大な人物というのは、後世に徳を及ぼし模範となる人でしょう。

ソクボンは、わが民族の優れた芸術を全世界に轟かせた偉人です。(中略)

このようになるまでには母の真心がこもった教えが支えとなった点を忘れてはなりません。<sup>14)</sup>

友情に目を向けさせる作品もある。

今日子弟の教育においては「友人」関係の指導がきわめて大切なものとして取り扱われています。とくに、思春期の少年少女たちの友人関係は、その子の将来を左右しかねないものです。(中略)

「オソンとハナム」の話は、困難さの中でも知恵と笑みを失わないという手本となるもので、とくに、友情を強調する祖先たちの聡明さにわれわれの目を開かせてくれることでしょう。<sup>15)</sup>

現在では、忠義はあまり問題にされなくなっているであろうが、『オングルとピョンガンゴンス』の「読書の手引き」には、「忠孝」が出てくる。

われわれがよく知っているわが国の偉人以外にも、歴史に埋もれながら宝石のように輝く人物たちは多いのです。オングルとピョンガンゴンスは、それに属するとみて間違いはないでしょう。(中略)

この話のなかで輝いているのは忠孝思想です。

「国には忠誠を尽くし、父母には孝行の道を尽くせ」

このようなことばを、子女や教え子たちに百遍言うよりも、本書を一回読むことの方がはるかによいのです。(中略)

「善良な気持ちで正しいことにのみ従うならば、他人から仰ぎ見られる人物にだれでもなれる」という教訓を得ることができます。

読書指導の力点をここに置いてください。そして、オングルを夫としたピョンガンゴンスの勇気ならびにオングルを将軍に仕上げた知恵も話題にしてください。高句麗人は勇猛で聞こえた韓民族です。<sup>4)</sup>

伝記と関連づけて、現在の児童のぜいたくさや、物質的な満足感を得ても精神的活動は軽んじられがちである風潮を指摘する作者もいる。

ソクボンは、川を渡るための踏み石やかめを紙代わりに字の練習をしました。今日のわれわれの子どもたちならどうしますか。

現代のわれわれには、深い反省心を抱かせる崇高な行為と言わざるを得ません。<sup>14)</sup>

わが祖先たちの人生を見ると、清廉潔白な暮らしこそ基本であることを見てとれます。

富と名誉を追い求めるよりは、たとえ貧しい暮らしをしても、清廉潔白に暮らすことを最大の誇りとしました。(中略)

慈愛溢れる人柄で清廉潔白な一生を送ったファンヒ宰相の話は、精神や道義がしだいにすたれつつあるように思える今日において、なににも増して貴い教訓を示してくれます。

すなわち、物質にのみ偏りがちな今日子どもらに、人生の真価とはなにかを自覚させてくれ、清く正しい生活、健全な精神を備えるのに、大きな助けとなるでしょう。<sup>8)</sup>

このように、道徳の範疇で語られる内容でたたえられる人物もいるが、『偉人伝叢書』の多くの巻を飾るのは、愛族・愛国精神の持ち主である。伝記の作者たちが述べる賛辞のいくつかを見てみよう。

この世でもっとも貴いものの一つが命でしょう。

こうした命をなげうって国を救おうとする人物、これこそ偉人中の偉人です。(中略)

ハルビン、いや世界に響いた銃声でわが民族の魂を高めた民族の星アンジュンギン義士はわれわれに何を与えてくれたのか、みんなで一緒に悟り模範とするのです。<sup>20)</sup>

純朴な農民の子に生まれ日本軍の隊長を倒すまでのユンボンギル義士の立派な様子から、われわれは祖国と民族そして独立とはどんなことであるかを気づかされたのです。

外国では、親が子どもに必ず、その国の英雄や偉人の話を聞かせてやります。そうした教育をわれわれもぜひやらねばと思います。

日本に踏みにじられたわが民族でしたが、誇らしい愛国者が多数いたことをわが国の子どもたちに記憶させて、二度とこの地でこのようなことがないようにしなければなりません。<sup>22)</sup>

「コリア幻想曲」には他の者が追従できない愛国精神がこもっています。だから、名曲として輝き、全世界の人々から拍手喝采を受けたのです。

わが身だけをいたわることなく、虐待され抑圧された韓民族のためにという精神がありました。

アンイクテ先生が偉人として尊敬されるのは、まさにこの愛国精神が芸術に昇華したからです。

この点をとくに、子女たちが理解するよう指導してください。

真の芸術家とは何かということを、伸びゆく子どもたちが理解するようになければなりません。<sup>23)</sup>

トサン・アンチャンホ先生は、自分自身修養に努めながら民族の指導者として一生を救国運動に捧げた愛国者でした。(中略)

かれは、民族の運命は力で決まるから、独立のためには民族の力を培わねばと唱えながら、その力は民衆各人の徳力・知力・体力の総和であることを強調しました。

それゆえ、民族の基礎力量を養うには何よりも民族構成員めいめいの力を養う道しかないとかれは叫びました。(中略)

口先でだけ新精神・新人類・新民族を叫び「力を養おう」と唱えたのではなく、進んでほうきを持って他人の家の前を掃いてあげながら「清潔」を教え、「チョムジン学校」をつくって着々と民族の力を涵養しながら、それでも名誉なんてことは考えさえしませんでした。

今われわれは強大国の目に見えぬ力で包囲されています。このような時なればこそ、われわれはトサン精神で子女や児童を教育し、新人類・新民族に団結する力を示さなければなりません。

これが、子孫に、真に富強の祖国を抱かせてあげる大人の使命でしょう。<sup>24)</sup>

「家庭内に不和があれば家は滅び、国内が分裂して争いがあれば国は滅びる」というキムグ先生の教えと、真の愛国精神とはなんであるか、を子女に植え付けてあげ、国と民族とはなんであるか理解する道しるべとしなければならないでしょう。<sup>26)</sup>

## 結 語

キョンジ社刊『偉人伝叢書』（児童向）を主たる素材とし、国民学校（わが国の小学校に相当）の教科書も参照しながら、韓国の児童が伝記からなにを学ぶのかを探ってみた。

その結果、気づいた点を挙げよう。

第一に、伝記の対象として多数の自国人（韓国・朝鮮人）が取り上げられている点。

第二に、伝記の人物の評価観点の一つが、愛国・愛族（民族）である点。

第三に、伝記の人物の評価観点の別の一つが、忠義・孝行・友情・清廉潔白・良妻賢母等、倫理道德の範疇に入るものである点。

上記の点に、国や民族を大切にし、儒教精神を尊ぶ韓国人の気持ちが表れているのだと筆者は考える。

国民学校の時代からかなり多数の朝鮮の先人の伝記を教科書で学習するのも、国や民族を大切にしている心情を、祖先や先輩を敬うなかで学ぼうとする姿勢の表れではないかと思う。

すでに「まえがき」で述べたように、中国の児童が読む科学者伝もまさに中国人科学者伝であった。

わが国でも、かなり多数の偉人伝シリーズが刊行されている。それらがどのような観点から人物の選択をしているのか、その観点と韓国の偉人伝における人物選択の観点との異同については別の機会に論じたいが、業績だけを追った伝記であって欲しくないというのが筆者の気持ちである。人物が生き生きと息づく様が見えるような伝記、それも、自国の先人の伝記を児童に読ませたいと思う。

## 引用文献

- 1) 井上雅夫「理科教育と科学技術史－中国の科学普及書に学ぶ－」（『岩手大学教育学部研究年報』39巻, 1979年), 33-44頁。
- 2) 井上雅夫「子ども向け図書にみられる多様な科学者観－日本と中国の図書を素材として－」（『岩手大学教育学部研究年報』51巻2号, 1991年), 201-218頁。
- 3) 尹学準(監修)・筒井真樹子(編訳)『韓国の教科書の中の日本と日本人』, 一光社, 1989年, 198頁。
- 4) イヒョソン『オンドルとピョンガンゴンス』, キョンジ社, ソウル, 1990年, 93頁。
- 5) イヨンホ『チャンボゴ』, キョンジ社, ソウル, 1990年, 93頁。
- 6) イウォンス『カンガムチャン』, キョンジ社, ソウル, 1988年, 93頁。
- 7) チョデヒョン『チェムソン』, キョンジ社, ソウル, 1989年, 93頁。
- 8) イヒョソン『ファンヒ』, キョンジ社, ソウル, 1989年, 93頁。
- 9) イヒョソン『セジョンデワン』, キョンジ社, ソウル, 1993年, 93頁。

- 10) チョデヒョン『チャンヨンシル』, キョンジ社, ソウル, 1990年, 93頁。
- 11) イヨンホ『イファン<イテゲ>』, キョンジ社, ソウル, 1991年, 93頁。
- 12) チョデヒョン『シンサイムダン』, キョンジ社, ソウル, 1989年, 93頁。
- 13) イドンリョル『イユルゴク』, キョンジ社, ソウル, 1989年, 93頁。
- 14) イジュニョン『ハンソクボン』, キョンジ社, ソウル, 1989年, 93頁。
- 15) イヒョソン『イスンシン』, キョンジ社, ソウル, 1992年, 95頁。
- 16) イヒョソン『オソンとハヌム』, キョンジ社, ソウル, 1993年, 93頁。
- 17) イヒョソン『御史パクムンス』, キョンジ社, ソウル, 1993年, 188-189頁。
- 18) イヨンホ『イスンファン』, キョンジ社, ソウル, 1990年, 93頁。
- 19) イヒョソン『キムジョンホ』, キョンジ社, ソウル, 1989年, 93頁。
- 20) キムジョンサン『アンジュンゲン』, キョンジ社, ソウル, 1991年, 93頁。
- 21) パクギョンヨン『ユグァンスン』, キョンジ社, ソウル, 1988年, 94頁。
- 22) イヒョソン『ユンボンギル』, キョンジ社, ソウル, 1990年, 93頁。
- 23) イヒョソン『アンイクテ』, キョンジ社, ソウル, 1993年, 93頁。
- 24) イヒョソン『アンチャンホ』, キョンジ社, ソウル, 1989年, 93頁。
- 25) ソンチュニク『パンジョンファン』, キョンジ社, ソウル, 1993年, 93頁。
- 26) ユギョンファン『キムグ』, キョンジ社, ソウル, 1991年, 93頁。
- 27) 『図説韓国史 第2巻 三国時代』, 啓蒙社(邦訳『絵で見る韓国の歴史』, エムティ出版, 1993年), 102-107頁。
- 28) 『図説韓国史 第7巻 李朝2』, 啓蒙社(邦訳『絵で見る韓国の歴史』, エムティ出版, 1993年), 98-101頁。
- 29) 高等学校教科書『国史』(邦訳『世界の教科書=歴史 韓国2』, ほるぷ出版, 1982年), 133-138頁。
- 30) 『図説韓国史 第10巻 解放・朝鮮戦争, 韓国の経済発展と民主化』, 啓蒙社(邦訳『絵で見る韓国の歴史』, エムティ出版, 1993年), 25-34頁。
- 31) 国民学校国語教科書『読方 3-1』, 1994年, 47-56頁。
- 32) 国民学校国語教科書『読方 3-2』, 1994年, 81-90頁。
- 33) 国民学校国語教科書『読方 4-1』, 1994年, 5-14頁。
- 34) 同前, 41-50頁。
- 35) 同前, 115-124頁。
- 36) 国民学校国語教科書『読方 4-2』, 1994年, 15-22頁。
- 37) 同前, 31-42頁。
- 38) 国民学校国語教科書『読方 5-1』, 1994年, 31-40頁。
- 39) 同前, 111-120頁。
- 40) 国民学校国語教科書『読方 5-2』, 1994年, 61-70頁。
- 41) 同前, 125-134頁。
- 42) 同前, 39-50頁。
- 43) 国民学校国語教科書『読方 6-1』, 1994年, 37-46頁。
- 44) 同前, 137-146頁。
- 45) 国民学校国語教科書『読方 6-2』, 1994年, 71-80頁。
- 46) 同前, 107-116頁。

- 47) 国民学校道德教科書『生活の道しるべ 4-1』, 1994年, 98-103頁。
- 48) 同前, 122-132頁。
- 49) 国民学校道德教科書『生活の道しるべ 4-2』, 1994年, 106-111頁。
- 50) 国民学校道德教科書『生活の道しるべ 5-1』, 1994年, 88-93頁。
- 51) 国民学校道德教科書『生活の道しるべ 5-2』, 1994年, 10-13頁。
- 52) 同前, 18-23頁。
- 53) 同前, 33-35頁。
- 54) 国民学校道德教科書『生活の道しるべ 6-1』, 1994年, 6-9頁。
- 55) 同前, 17-18頁。
- 56) 国民学校道德教科書『生活の道しるべ 6-2』, 1994年, 11-15頁。
- 57) 同前, 57-61頁。
- 58) 同前, 120-124頁。
- 59) 国民学校教科書『音楽 3』, 1994年, 52-53頁。